

教育実習事前演習における机間指導力向上のための演習

松井 孝彦

外国語教育講座

The Skill-up Training for Improving Skills for Supporting Students' Individual Work in the Training Program for Teaching Practice -

Takahiko MATSUI

* Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords : 教育実習 指導法 机間指導

本稿は、教育実習の事前演習で行った指導や活動の中から、机間指導に関わる指導及び演習についてその内容と学生の振り返りを報告することを目的とする。

筆者は中・高等学校の教員であった頃、授業の目標を達成させるためには机間指導が重要であると考え、その指導を重視していた。しかし、本学附属中・高等学校に勤務をしていた際、教育実習生が机間指導の基礎を理解しておらず、適切に机間指導を行うことができない様子を見てきた。そして、昨年度まで教職大学院の授業内で机間指導の講義及び演習を行ってきた。

2020年度は、かつてない感染症の流行により、教育実習期間が例年よりも1週間短くなった。これに伴い、本学開設の4単位の教育実習において、40時間の時間不足が発生した。そこで、大学で40時間の「教育実習事前演習」を行うことにより、不足した時間を補充することとなった。本稿では、はじめに本学英語選修・専攻の学生に対して行った事前演習全体について説明をする。そして、事前演習内で行った机間指導について、「理論面の指導と学生の振り返り」と「実践演習と学生の振り返り」について報告をする。本稿を通して机間指導力を高めることを目的とした具体的な指導事例と、教育実習の前に机間指導に関する指導を行うよさを示していきたい。

I 教育実習事前演習の趣旨及び内容について

1 事前演習の趣旨と受講学生

本学では、文部科学省より2020年5月1日に通知された「令和2年度における教育実習の実施期間の弾力化について」を受け、教育実習の趣旨を満たすことができるよう、学校教育の実際を体験的、総合的に理解できるような実習・演習等を40時間（大学の授業換算で27コマ相当）行うことが決定された。その授業内容については以下のような活動が例示された。

- 学校教育活動を撮影したビデオに基づく、学生による幼児児童生徒の観察記録の作成など
- 学生個人による学習指導案の作成や、指導案協議

- を踏まえた修正版の作成など
- 学生個人やグループによる教材分析・教材研究の協同作業など
- 時間を限って行わせる、学生個人やグループによる保育/学習/保健指導や生徒指導の模擬的な実施など（教師役・子ども役を設定したマイクロティーチング）
- 学生グループでの分析や創作に関する協議、アイデア共有、報告への質疑応答など

これを受け、本学の各選修・専攻において教育実習を担当する教員が、主となる教員免許を取得するために実習に参加しようとする学部3・4年生を対象とした授業を考え、実施することとなった。

筆者の担当する英語選修・専攻では、学部3年生46名、学部4年生10名に加え、教職大学院所属の学生で小学校免許取得コースに所属をする3名を含んだ計59名を対象とし、6日間の事前演習を行った。

2 英語選修・専攻の事前演習内容

筆者は、例年通り教育実習が行われていた場合、最初の週に実習校で得られることができたと考えられる学びを整理し、同様の学びが得られるように、以下のような実施計画を立てた。

1日目 大学： 6時間	オリエンテーション ・教育実習における3週間の学びの確認 ・第1週に実習校で学ぶ内容の確認 ・事前演習の日程の確認
課題： 4時間	【講義】朝及び帰りの会の役割と、指導の留意点 【講義】生徒指導の留意点 【講義】学習記録の取り方 ・授業の参観から学ぶことの確認 ・工学的アプローチと羅生門的アプローチの確認 【講義】指導案の書き方指導と指導案作成課題説明 【講義】机間指導の基本と机間指導課題説明

2日目	<p>【演習】朝及び帰りの会</p> <p>【演習】指導案の読み込み、検討（グループ活動）</p> <p>【演習】机間指導</p> <p>【演習】学習記録（小学校外国語活動の授業動画を視聴しながら学習記録をとり、授業検討を行う。授業検討は工学的アプローチによる。3日目の演習も校種を変え、同じ内容で。）</p>
3日目	<p>【演習】学習記録（小学校外国語）</p> <p>【演習】学習記録（中学校英語）</p> <p>【演習】学習記録（高等学校英語）</p>
4日目	<p>【演習】学習記録（中学校英語を羅生門的アプローチによって。）</p> <p>【講義】模擬授業の説明及び模擬授業の課題の説明</p> <p>【演習】模擬授業準備（指導略案及び教材作成）</p>
5日目	<p>【演習】模擬授業及び検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10人グループ5つ、9人グループ1つ。 ・一人30分の模擬授業を、この日は6名分。
6日目	<p>【演習】模擬授業及び検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5日目と同じグループ ・一人30分のも技授業を、この日は4名分。 <p>総括・振り返り</p>

8月下旬から9月上旬にかけて行われた事前演習では、上記の計画通りに授業を行うことができた。机間指導に関しては、1日目の講義と2日目の演習の場面で取り上げて指導した。

II 机間指導に関する指導について

1 授業を組み立てる際に参考にした資料

本年度の事前演習における机間指導の講習及び演習について、それを組み立てる際に2つの先行研究、2つのWebサイト中の資料、そして教育工学事典を用いた。

先行研究については、久保田・渡邊（2018）と加藤・桐生・大島（2020）を参照した。久保田・渡邊（2018）は、小学校理科の授業で行われるグループ活動時の机間指導において、新採教員とベテラン教員の注視の特徴をウェアラブルカメラを用いて分析し、再生刺激法によるインタビューの発話を加味して、指導中の思考の違いを調査した。その結果、ベテラン教員は新採教員よりも学級全体及び児童のプリントに注視することが分かった。そして、インタビューへの回答と合わせて、ベテラン教員は教室全体の状況を把握しようとする広い視野を持ち、プリントから児童の思考を把握しようとしていることが明らかになったとしている¹⁾。また、加藤・桐生・大島（2020）は、熟達教員2名と教職未経験者4名の理科授業中における机間指導の特徴について調査をした。熟達教員による中学校理科の授業と、教職未経験者による小学校理科授業とを観察した結果、「熟達教員は、机間指導において

観察重視か支援重視かは授業者によるが、教職未経験者は支援の机間指導が多い傾向がある」とこと、「熟達教員は学習者自身よりも学習者の教材を見ている回数が多いが、教職未経験者は学習者自身も学習者の教材もほぼ同じ回数見ている」ことが明らかになったとしている²⁾。

Webサイト中の資料としては、高等学校初任者のために机間指導のねらいや机間指導中における生徒との関わり方が書かれたガイド³⁾と、机間指導のねらいに応じて教室を具体的に移動する動線が書かれた資料⁴⁾を参照した。

教育工学事典については、机間指導に関して示されている次の3つの機能を授業で扱うこととした⁵⁾。

- ・子どものつまづきや学習状況を把握する（観察・実態把握）
- ・個別に適切な指導助言を行う（指導）
- ・クラス全体の傾向をつかみ、今後の授業の指導方針を立てる（評価・計画）

2 事前演習の指導内容

前節の内容をまとめ、講義及び演習では以下のような指導を行った。なお、それぞれの具体については、次章以降で示していくこととする。

講習 (1日目)	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導の位置付けの確認 ・机間指導の機能に関する具体的な説明と、それぞれの機能における具体的な指導の視点及び具体的な指導方法 ・机間指導を効果的に行うための教材研究のポイント ・机間指導中の児童生徒との関わり方
演習 (2日目)	<ul style="list-style-type: none"> ・15人グループ3つ、14人グループ1つを形成 ・自力解決の場面における机間指導を、一人2分半ずつ行い、その後一人ずつ振り返る。自力解決の場面で使用する教材（主にドリル教材）は各学生が事前に作成する。

III 机間指導の講義と学生の振り返り

1 具体的な講義内容

実際の講義では、以下の(1)から(8)までの内容について、それぞれプレゼンテーションのスライド1枚ずつを用い、講義した。

(1) 机間指導について

筆者が附属学校勤務中によく見た実習生の机間指導に関して、以下の3つの実態を伝えた。

- ・ただ机の間を歩く人が多い
 - ・一人の子どもに対する説明が長い人が多い
 - ・誰に対する指導か分からない声かけが多い
- そして、「そもそも机間指導とは何のために行うの

か」という問いを投げかけた。

(2) 机間指導の位置付け

机間指導は「単元の目標」や「本時の目標」を達成させるために、個人やグループに対して行われる教育活動の一つであることを伝えた。そして、机間指導が授業内で独立した活動になってはおかしいことや、机間指導がその前後の活動と密接に関連しなければならないことを確認した。

(3) 机間指導の機能の確認

「単元の目標」や「本時の目標」を達成させるために、机間指導には3つの機能があることと、その機能における指導方法を具体化する必要があることを確認した。

(4) 機能「観察・実態把握」の目的及び指導の視点

子どものつまずきや学習状況を把握するための「観察・実態把握」について、「子どものつまずきを把握し、次の『指導』に生かす」ことが目的であることを確認した。そのための具体的な指導の視点として、以下の3点を伝えた。

- ・学習に集中しているかどうか
- ・全員が課題の意味を理解しているかどうか
※つまずいている子どもが多い場合や、子どもの活動が意図する学習課題とずれている場合は、あらためて全体に指示を出し直す必要がある
- ・課題解決にどの程度の時間がかかりそうか

(5) 機能「指導」における、指導の視点

個別に適切な指導助言を行うために、以下の4つの視点を伝えた。

- ・評価規準・基準に基づき、C評価の子どもをB評価にするための指導を行う
※教材研究の段階で、予想される子どもの間違いと、その間違いに対して与える正しい考え方のヒントを事前に考えておくことが重要
- ・学習の高まりや深まりの見られる子どもに、発展課題を与えたり次の指示を出したりする
- ・よい考えをほめる
- ・つまずいている子どもについて、考えが適切な部分までを示し、ほめる（部分肯定）

(6) 機能「評価・計画」における、指導の視点

クラス全体の傾向をつかみ、今後の授業の指導方針を立てるための「評価・計画」の指導について、以下の3つの視点を伝えた。

- ・「(関心・意欲・) 態度」や「技能」「思考力・判断力・表現力等」について評価する(AやCに注目してメモを取る)

- ・意図的な指名をする場合、どの子どもをどういった順で指名するか考える
- ・自力解決後の全体共有・確認の場でぜひ取り上げたい考えを把握しておく

(7) 効果的に机間指導を行うためのポイント

「単元の目標」や「本時の目標」を達成させるために、機能「指導」の場面における「見取り」や「指導」の視点をあらかじめ決めておくことが重要であると伝えた。また、留意事項として以下の3点があることを伝えた。

- ・座席表等のメモ用紙をもって指導にあたること
- ・子どもの表情や取り組みの様子に注目するだけでなく、プリントへの記述内容に注目をして理解度を推測するようにすること
- ・指導のための具体的な移動ルートをあらかじめ考えておくこと

(8) 子どもとの関わり方

机間指導時に、具体的にどのように子どもと関わり、どのような言葉で語りかけるかを、以下の4点から確認した⁶⁾。

- ・寄り添う：助言を与えたり、「この考えは素晴らしいね」とほめたりする
- ・つなげる：グループ学習において個々の意見を関連付けたり、話し合いを促したりする
- ・広げる：よい考えを持っている子どもに対して「これは……ということ？ とてもよい考えだね。参考になるね」とまわりに聞こえるような声でほめつつ、他の子どもへヒントを与える
- ・いかす：評価をしながら計画的な指名について考える。「とってもよい意見だね。あとで発表してくれるかな」と声をかける。

2 学生の振り返りから見られる学び

1日目の最後に、その日の学びについて学生に振り返らせ、用紙に記述させた。1日目には多くの内容について講義を行ったが、机間指導に関する振り返りが多く見られた。その振り返りに書かれた記述から、学生の学びをまとめていく。

(1) 新しい知識の獲得

- 机間指導における重要性をはじめて知ることができた。
- 机間指導については授業で触れられたことがなく、このまま教育実習に行けるのか不安であったが、様々な知識を学ぶことができ、安心することができた。

「知らないことが多かった」「詳しく学ぶことができた」という振り返りが多くあった中、具体的に机間指導の重要性を理解した学生や、知識の獲得が安心感の獲得につながった学生がいたことが分かった。

(2) 学び直し

- 知っていることもあったが、もっと早く学んでいなかったと思うことも多かった。
- 先生としての技術が試される場面だと思っていた。名古屋市のインターン中に難しいことだと実感していた。今回の学びを活かしたい。

学生の中には、既に小学校や中学校等の授業にサポーターとして参加をした経験のある者もいる。そういった学生には、机間指導の経験に理論付けをすることができたのではないかと考えられる。

(3) 意義・目的に関する学び

- 考え方が変わりました。何のためにするかをあまり考えたことがありませんでした。こういった児童生徒へのフォローをしっかりと学ぶことができよかったです。
- 説明が深く、そのような意図・目的があったのだと勉強になった。
- これまで何度か模擬授業を行った中で、いつもどうやったらいいのか、どう支援するのか、分からず困っていました。ミニ指導案作成のもと、効率的で効果的な机間指導ができるよう準備してみようと思いました。
- 1・2年生のときに行った学校サポート活動で机間指導を何度かしたが、6～8割は散歩になってしまっていたと思った。実習までにはきちんと目的を持った指導ができるように計画を立てて臨みたい。

机間指導の意義や目的を学んだ学生の多くが、教材研究の段階で「予想される子どものつまずき」と、そのつまずきを解消させるための「ヒント」を準備することの重要性を理解したようであった。

(4) 支援以外の視点の獲得

- 机間指導の重要性を感じることができた。これまではできていない子一人につききりになることが多く、時間が足りなくなっていたので、クラス全体のことを考える必要があると思いました。
- 机間指導を、分からない児童が困っているときの手助けの方法くらいにしか思っていませんでしたが、机間指導の仕方ひとつで学習が大きくかわることが分かったため、実習でも気を付けたいと思いました。
- 個の支援だけではなく、観察を通してその後の指

導計画の調整をしたり、評価をする時間にあてたりすることが分かった。「散歩」ではなく「指導」に結び付けられるようにしたい。

- 生徒のやる気を出すための一つの方法としても役に立つということは初めて聞いたことであった。

加藤・桐生・大島(2020)にも、教職未経験者の机間指導は支援が多くなる傾向があることが述べられていたが、本学の学生の中にも、机間指導の機能を「指導」面でのみ捉えている学生がいたようであった。そういった学生は、「評価・計画」の機能や、子どもとの関わりの一つである「つぶやき」に対して意識が高まったようであった。

(5) 不安感と演習への期待

- 説明だけではどのようなことに気を付ければいいのか実感できなかったので、演習をさせてもらえるということで安心した。
- 机間指導は技術が必要であり、不安も大きい。これからの演習でしっかりと準備していきたい。

決して肯定的な学びを得た学生ばかりではなかった。講義を受けた結果、自分にできるかどうか不安になった学生もいたようであった。幸いなことに、演習を行うことが予告されていたことから、1日目の講義の段階で机間指導や教育実習に対して消極的になる学生は見られなかった。

IV 机間指導の演習と学生の振り返り

1 机間指導演習の準備段階における指導内容

1日目の講義の最後に、机間指導の演習に関する具体的な動きについて説明するとともに、机間指導で使用するための教材を各自で作成するよう指示した。

机間指導の演習では、自力解決の場面における個別指導をさせることとした。学生には、子ども役が取り組むこととなるドリル教材について、以下のような視点を考慮しながら作成するよう指導した。

- ・ 5分程度で取り組むことができる分量で作成すること。
- ・ 問題の種類及び用紙の大きさは自由とすること。
- ・ 教材を通して何を身に付けさせたいか、ねらいを持って作成すること。
- ・ 問題に対して、「予想される子どものつまずき」と「解決のためのヒント」を考えておくこと。
- ・ 3つの機能について演習することができるよう、問題の配列を考えて作成すること。

2 机間指導演習当日の活動

仮想の学級として15人グループを3つ、14人グループを1つ作成した。これらのグループを、教卓に向

かう一斉授業の形態で、縦3列、横5列で配置させた。また、机間指導をしやすくするために縦列の間を開けさせた。

机間指導演習の進行については、およそ以下の時間で進行するように学生へ伝えた。

1分	ドリル用紙配布
30秒	授業者による、ドリル活動を含む前後の活動内容と、ドリル活動のねらいの説明
2分30秒	机間指導演習 ※35人学級において5分間の机間指導となることを想定とした時間設定
1～2分	授業者による振り返りと簡単な意見交換

教師役の学生が机間指導演習で意識的に取り組む内容について、以下の点を確認した。

- ・「観察・実態把握」については、全員が集中して取り組んでいるか、全員が活動内容を理解しているかどうかを最低限確認すること。
- ・「指導」については、問題に取り組むことができている子どもに対して、部分肯定ができるところは部分肯定をし、ヒントを与え、再度巡回をする際に確認することを目標とすること。
- ・「評価・計画」については、可能な限り取り組んでみる。

子ども役の学生に対しては、ドリル問題を順調に解くばかりではなく、時折分らないような演技をするとうい話をした。そうすることで、教師役からの指導を直接得ることができようになり、子どもの立場から机間指導の意義が理解できることを伝えた。

実際の机間指導演習では、学生が様々な動きを見せていた。筆者の指導通り「観察・実態把握」のために1巡し、2巡目で部分肯定とヒントを与え、3巡目で再度確認をするという動きができた学生は少なかった。多くの学生が、1巡目から「観察・実態把握」と「指導」を行い、問題に取り組むことができている子どもを見かけると、丁寧に指導をしていた。学生によっては、1巡もすることができない段階で演習時間を終える者もいた。

当初は、全学生が机間指導演習を終えた後に、筆者が事後指導を行うことを考えていたが、3番目の学生が机間指導演習を終えた段階から、少しずつ助言を与えるようにした。そして、全ての学生が机間指導演習を終えた後に、以下の点についてあらためて指導をした。

- ・子どものつまずきの予想と与えるべきヒントを事前に準備しておくとうい。
- ・「観察・実態把握」を行っている間は部分肯定とヒントを与えるのみとし、手厚い「指導」が必要な子どもを見つけだすようにするとうい。

3 学生の振り返りから見られる学び

2日目の最後に、その日の学びについて学生に振り返らせ、用紙に記述させた。2日目も4つの演習を行ったが、机間指導に関する振り返りが多く見られた。また、その学びの多くは学生が失敗したという思いに基づいたものであった。振り返りに書かれた記述から、学生の学びをまとめていく。

(1) 演習を通じた気付き

- 自分が最初の演習者だったので勝手が分からなかったが、他の人の机間指導を通して反省も多く生まれた、それを改善して本番に臨みたい。
- 時間の配分や児童の反応を見ながら指導を行うことの難しさは実際にやってみなければ分からなかった。演習でありながらも難しさを実感することができた。
- 指導案では深く考えず「5分」と書いたり、「困った子がいればサポートする」など抽象的に書いたりしたけれど、実際にやってみると、自分では想定していなかったトラブルがあったり、援助しなければいけない児童の横を素通りしてしまったりと、難しさを実感した。
- 自分の想像を超えたつまずきがあったので、参考にしたいと思いました。

多くの学生が、実際に体験してみることで机間指導の難しさを学ぶことができたようであった。自分の指導技術の至らなさを自覚しつつも、実習本番までに練習をして改善していこうとする記述が多く見られた。また、指導案作成時には「机間指導を行う」と書いていたが、その内容や意義について理解し、机間指導の重要性を学んだ学生もいたようであった。

(2) 目的達成のための支援の工夫

- 全員に目を配りながら2周することができませんでした。事前に「～は違うから～しようね」と答えを言うのではなく、ヒントを与えてからまた戻ってくるのがよいと聞きたいだけれど、それができませんでした。工夫していきたい。
- 一人一人に対して意識を向けすぎて、全体が見えなくなって時間がかなり足りなくなった。全体に対して声をかけること、個人に声をかけることをしっかり見極めないといけないと思った。前もって予想される質問を考えておくことの重要性に気づいた。
- どうすれば目的に沿った活動にできるのか、どうすれば子どもの「分かる分からない」を明確にして「できる」につなげられるのかということに非常に考えさせられました。
- 一人一人に時間が取られることが分かった。あっているかないかよりも、手が止まっていなかったか

見た方がよいのか疑問であった。

- 事前に指導の仕方等を考えていたものの、指導を丁寧にしすぎたり序盤からじっくり解答を確認してしまったりしたせいで効率よく回ることができなかった。
- つまづくところなど似ている部分があり、あらかじめ指導の準備をしておくこと、メモを取りながらまわることなど、工夫を凝らすことで、子ども全員と向き合え、見ることができると思いました。

筆者が附属学校で実習生を指導していたときによく見た姿がこういった姿であった。多くの実習生が実習本番でこういった学びを得ていたが、事前演習の場で実感できたことに意義があると思われた。

記述には反省が多く見られたが、「子どものつまづきには共通した部分がある」ことに気付いた学生も何名かいたようであった。机間指導の重要性に気付いた学生のように、反省のみで終わらずに改善を目指そうとする姿も見られた。

(3) 児童生徒の視点からの学び

- 児童の気持ちになってみて分かることがたくさんありました。自分が教師役の時にはC評価の子をチェックして、2巡目で個別指導をすることを心掛けました。自分が児童役の時に「先生まだかな」と待っていたり、待っていてもほめてもらえなかったりすると、さみしくなることが分かりました。子どもに声かけをして自信を付けさせてあげたいと思いました。
- 子どもの目線に立ってみると「なんで来てくれないのだろう」「今来て欲しくなかった」「ここ教えて欲しいのに」といった様々な気持ちを抱くのに、指導者の目線に立つと急に子どもの気持ちが見えなくなってしまう、独りよがりな指導で手一杯になってしまう自分の姿に気付きました。
- 一人一人に声をかけることの大切さを、生徒役をやってみて感じました。できている子はできていない子に比べて素通りされがちな感じがしたので、できている子にも、ほめたり、次の課題を与えたりしてあげる必要があると感じました。

今回の机間指導演習では、いわゆるできる子に対する声かけについて指導をする機会が少なかったことが筆者の反省であった。上記の記述はまさしくその点を表していると思われた。機能「指導」の説明の中で、子どものよい考えをほめたり、学習の高まりや深まりの見られる子どもに発展課題を与えたりするとよいという話はしたが、机間指導演習ではC評価の子どもをB評価にするための指導に力点を置いて活動に取り組むよう指導していた。記述例はあまり多く見られなかつ

たが、この視点からの学びを得た学生が多くいることを願いたい。

(4) 自力解決時の課題設定について

- ドリル作成に関してだけでも、簡単すぎても難しすぎてもいけないと思った。簡単すぎると学びにならないし、難しすぎたら一人一人の手助けに時間がかかってしまう。
- スムーズに終わることができた。課題を「書き写す」ものとしたからかもしれないが、「全体を観ること」「ほめること」「早く終わった人に別のタスクを与える」などを意識した。
- 用意したプリントはどちらかというとテスト問題のようで、指導に不向きだった。あらかじめ子どもがつまづきそうなところを予測しておくのも机間指導には必要がだと思った。

机間指導が「単元の目標」や「本時の目標」を達成するための重要な指導場面であることを理解した学生の中には、本時の指導過程の中で机間指導が位置する場面を意識し、その場面にふさわしい問題を準備することに努力をした者がいた。その準備が想定通りに機能していた学生は目標を達成することができたといった振り返りをしていたが、自力解決の目的まで考えることができなかった学生からは、ドリル問題の質について反省を記述する様子が見られた。

IV まとめ

本年度は、かつてない感染症の流行により、年度当初から小中学校及び高等学校の教育現場ではカリキュラムの変更を余儀なくされた。それに伴い、教育実習に関しても、学校教育現場及び大学の双方において、その日程及び内容を大幅に変更する必要に迫られた。本学では、本来3週間にわたって実施される教育実習が2週間に短縮されたことから、不足となる1週間分を大学での教育実習事前演習として補充することとなった。英語選修・専攻学生の補充を担当することとなった筆者は、附属学校での勤務経験を活かし、教育実習の最初の1週間で学生が学ぶと思われる内容を整理し、それらを身に付けさせるための授業を組み立て、実施した。

実習生として学校教育現場へ来校する学生は、毎時の授業の組み立てについては意識できているものの、机間指導を適切に行うことができない者が多く見られた。それが原因となり、「本時の目標」を達成させることができない姿を多く見かけた。そこで、筆者は今回の事前演習の中で、学生の机間指導力を向上させるために理論面と実践面の指導を行おうと考えた。

講義を通した理論面に関する学びについては、筆者の期待通りの結果を得ることができた。しかし、実践

面については、多くの学生が机間指導の難しさを実感し、多くの課題を見つける結果となった。

例年通りであれば、学生の多くは教育実習中に行う授業において、机間指導の場面で何をすればよいかを迷い、授業後に実習校の指導教員から机間指導の目的や具体的な指導方法を学んだであろう。そして、机間指導に課題を抱えたまま教育実習を終える学生が少なからずいたのではないだろうか。本年度は、教育実習が始まる前に、学生は机間指導に関する学びを得ることができたように思われる。そして、教育実習が始まるまでにその課題への対策を講じることができたのではないかと考える。

机間指導が成功すれば、学生は実習校で「分かった」「できた」「先生ありがとう」という子どもたちの笑顔をよく見ることができであろう。そして、その笑顔を通して、学生が教職に対する魅力をさらに感じてくれるのではないかとと思われる。

最後に、教育実習事前演習全課程終了時の学生の振り返りの中から、机間指導に関する記述を一部紹介する。「よい学びになった」という記述の他、机間指導の重要さや机間指導を含んだ教育全体の在り方について学びを得た学生がいたことは、事前演習の成果であったと考える。

- 今までは授業を考え、導入、展開、まとめを行うだけに焦点がありましたが、今回の演習を通して、それらの中での動き、机間指導や声のかけ方など、より細かいレベルで授業を作り上げることに焦点がいき、とてもいい学びになりました。
- 学習記録の取り方、机間指導や朝の会、帰りの会のやり方などは全く分からない（知らない）状態だったが、まずどういうポイントがあるのかを理論として学び、それを実践することであらためて何に気を付けるべきか、どこが難しいかを体感できた。
- 授業の展開ばかり気にしていたけれど、他にも机間指導の仕方、子どもへの反応、子どもの実態を把握し、何を学ばせたいのか、どんな力を付けたいのかなど、子どもの理想像を掲げ、それに向けてどのような活動や授業展開、指導の仕方を考えることが大切であることが理解できた。

参考文献

- 1) 久保田善彦・渡邊裕弓 (2018) 「グループ活動中の理科教師は何を見ているのか」, 日本科学教育学会第 42 回論文集, 433-434.
- 2) 加藤栞里・桐生徹・大島崇行 (2020) 「熟達教員と教職未経験者の机間指導に関する研究」, 日本科学教育学会研究会研究報告 34 巻 5 号, 21-24.
- 3) 神奈川県立総合教育センター (2020) 「令和 2 年

度版高等学校初任者のための授業づくりガイド」<https://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/Snavi/kyouzaiSnavi/guide02pdf/02-99-00.pdf> (最終閲覧: 2020 年 11 月 29 日)

- 4) 光文書院 (2017) 「シリーズ企画 1. 授業の達人～「机間指導」の巻～」T-Navi+<ティーナビプラス>9 号, https://www.kobun.co.jp/Portals/0/resource/dataroom/magazine/dl/tnavi_plus09_02.pdf (最終閲覧: 2020 年 11 月 29 日)
- 5) 日本教育工学会編 (2000) 『教育工学事典』実教出版.
- 6) 前掲 3)